

2025年10月31日（金）

老球の細道 892号

10月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

記録的な猛暑も束の間、10月になったら途端に冷え込み、平年通りの秋がやってきた。私が幼少の頃10月末には初雪が降った。息子の結婚記念に植えたキンモクセイの花も散り、ニオイも消え去った。すべてがあっという間に終わる。終わりがあるから愛おしい。

1・読書から

◆「生徒に苦しいことをやらせる絶対条件は生徒が自らのぞんでいることである。そのためには①学ぶ主題の意味をよく理解している②学ぶ過程で進歩している実感がある③終わって自分が賢くなっている自信がある」〈遠山啓『教育への招待』太郎次郎社〉：選手を本物にするためには時として試練も必要になる。私たちコーチはこの言葉の「生徒」を「選手」に置きかえて考えてみることも必要だろう。

◆「どうしたらいいかわからん時は、自分の損になるほうを選ぶとよい。自分が得をするようなことに出会った時は、人間試される時だと思う。得をしたと思って喜んでいたら、多いに誤るということがある。人間、利には目がくらむものだ」〈三浦綾子『銃口・上』小学館〉：確かに自分の利、欲に流された時は後悔の念に苛まれた。何事も他人はごまかせるが、自分をごまかすことはできない。狡さはバスケットのコートだけでたくさんである。

2・新聞から

◆「1分の出場かもしれない。あるいはベンチにすら入れないかもしれない。様々な状況の中で、常に全力を尽くす。僕の中ではすごくシンプルなんです」〈朝日：スポーツ〉：日本人初のNBA選手田臥勇太の言葉である。43歳になった今では試合に出場することもままならない。それでもコートに立ち続け、自分自身の能力向上にチャレンジする姿はアスリートの鏡である。彼の著書『Never To Late（今からでも遅くはない）』

◆「冷静で合理的な判断よりも精神的、情緒的な判断が重視されてしまうことにより、針路を誤った歴史を繰り返してはならない」〈朝日：石破茂前首相：戦後80年所感から〉：「新しい戦前」と言われる現在、この言葉は重みがある。特にあらゆる組織のリーダーは十分にかみしめなければならない。戦争はいつの時代も始めるのはリーダー、死ぬのは庶民である。

◆「私が目標を達成できた秘訣を教えよう。それは絶対にあきらめないことだ」〈朝日：天声人語〉：「無用の用」でノーベル化学賞を受賞した北川進さんが敬愛した細菌学者パスツールの言葉である。中国の故事にもあるが「99敗後の1勝」。何事も勝つまで挑戦する。

◆「柔道の“道”は畳の上で学んだことを日常生活や人生で発揮していくこと。いま、真の柔道家かどうか試されていると思う。どれだけ競技が強いのか、ではない。私は人生の最後まで柔道家でありたい」〈朝日：スポーツ：柔道家・山下泰裕〉：2023年に頸椎損傷で車いす生活を強いられている柔道の山下康裕氏、首から下は、左手を少し動かせるだけだという。人生の逆境に合った時、バスケで学んだことを私は発揮できるだろうか。